【勤務参考】32　　１５．９．２４

技術開発官（船舶）

講演紹介「漫画は社会の役に立つか？」

本年度の高級幹部会同において、漫画家　弘兼　憲史氏の講演を聴講する機会があったので、その内容等について紹介する。

弘兼　憲史氏は昭和２２年９月生まれ、山口県出身、代表作「課長　島　耕作」「加治隆介の議」「黄昏流星群」などがある著名な漫画家である。早稲田大学出身で松下電気産業で３年間のサラリーマン経験がある。

氏は団塊の世代であり、漫画とパラレルに進化したという。

小学校までは「少年ブック」「漫画王」などの雑誌に触れ、小学校６年生のときに「少年サンデー」「少年マガジン」が発刊され、成年になると「ビッグコミック」「週刊漫画」「漫画コミック」など全盛時代であった。

漫画家に転向後、「課長　島　耕作」を執筆し、自分自身が歳を重ねるとともに昇進し、現在は取締役までなっている。これも団塊の世代の同級生達が各分野でそのような職に就いていることが影響している。

今は、団塊の世代がまもなく高齢化社会の中心をなすであろうことを予測してシルバー世代のための漫画（「黄昏流星群」など）を手がけるようになった。

一時漫画がゲームなどに追われ衰退していたが、かつても漫画衰退の時代があった。というのも漫画は娯楽と捉えられ、活字こそが教養という誤った（？）観念が優っていたからである。本来比較すべきことではないが、漫画より活字が創造力の育成には有効であるという考えであった。しかし、「絵」も情報であり、むしろ活字の限界を超える可能性もあると考える。というのも、例えば海をみたことのない人が活字から「海」を想像する場合を想定すれば、画像情報で「海」をイメージアップすることが、より正しい想像力を生み出すことになるのではなかろうか。

ともかく、おかげで現在は漫画全盛時代であり、漫画を読まない学生は大学生にあらずといわれるまでになり、ひいてはサラリーマンまでがその延長線上に位置している。

さて「加治　隆介の議」はたまたま政治家を主人公にしたもので、従来から漫画の世界では政治家は悪いイメージの存在であったが、そのためかどうかは定かではないが、政治家を志す人が減ってきた。かつてのように「末は博士か大臣か」というような「世のため、人のため」の精神を失いつつある昨今を憂い執筆した。現在の防衛庁長官や多くの若手政治家を取材し、物語の発端となり、途中の舞台ともなる海上自衛隊、防衛庁もその取材の対象とし、大変多くの協力が得られた。結果的には有意の士が、この漫画を読むことで輩出されようとしている昨今を考えれば、役に立った例として誇れるのである。

最近の心配事のひとつに「教育問題」がある。ある調査によれば「先生を尊敬していますか？」という問いに対し我が国は２５％の人しか「イエス」と答えていない。先進諸国のみならず発展途上国の大半がゆうに５０％を超え、近隣の韓国や中国は８０％以上であるという現実がある。これは戦後の誤った平等主義の浸透の弊害であると同時に、突出し

たエリートの減少を意味する。この辺について何らかのメッセージを載せて漫画で訴えていこうとも考えている。

「黄昏流星群」は中高年のラブストーリーであり、昨年のコミック大賞を受賞した。これからの高齢化社会、現在でも５０歳以上が４０％を越える日本、団塊の世代がその中心をなす時代の到来などから、自分を含め漫画と同調してきた団塊の世代のためのシルバーコミックである。ハラハラ、ドキドキ感を醸成して免疫力を付けるためでもある。いわゆるナチュラルキラーと呼ばれる善玉の活性化である。「笑い」は健康に良いという結果を得て落語界なども盛んにシルバーを対象としてキャンペーンを繰り広げている。漫画もその点では効果の一端を担うことになる。ちょっと脱線するが、この漫画を描く際にもっとも苦労したのが老女の裸体描写であった。母親を想像するのはあまりに不遜であると考え、某元野球監督の奥さんの（サッチー）写真集なども購入して研究した。（場内爆笑）

「島　耕作」シリーズは松下電器産業勤務時代を参考にして作っているが、現在は取締役になり、中国担当とした。これは中国の強さに着目し取材を通じて「あなどれない大国」と感じ、危機感さえ抱いているからである。中国のエリート教育はすさまじく、シリコンバレーからの帰国推進、その波及力はすさまじいだろう。例えば年間１０００人のエリートを育てたとしよう。二年目には２０００人になる。日本はせいぜい年間１００人育てるのが関の山、二年目に２００人になっても、差はどんどん開いていく。コピー能力も日本人に負けず劣らず優秀な大国中国は脅威そのものである。我が国では、中国は一人っ子政策で２０年後には少子化時代を迎えそんなに伸びないよ、などと言う人がいるが、そんなに悠長に高をくくってはおれない。当然大国であり、二人目からは登録しないで密かに養っているという情報もあり、その絶対数は日本の人口の半分に匹敵するぐらいいると見積もられ、当然あなどることはできない。そこで対中国経済戦略の最先端として、今や日本が世界一と言われ、他の追随を許さない介護ビジネスは期待できる。またコンテンツ産業をバックアップする仕事として、世界に通用しリードしている業界が「コミック」「ゲームソフト」「アニメ」である。そんな点でも漫画は大いに役立つものとして認められるべきであると考える。

自分は「情報漫画家」である。「社会に役立つことを漫画を通じてメッセージとして送り出す」ことにこころがけ、読者がそれに気がついてくれれば「漫画は社会に役立つ」のである。

付言；

①論旨がわかりやすく、テンポもよく、代表作のコマを背景にして話され心地よく聴講できた。風貌は「眼鏡に口髭」だったが、眼鏡を外し口ひげも剃れば、まさに「島耕作」の風貌であった。

②「加治隆介の議」は現海上幕僚長が広報室長、部隊指揮官時代に防衛論議のＱ＆Ａの解りやすい教科書として部下に購読を勧めたという。全２４巻一度は目を通してみることを勧める。